

## 世界の可塑性と造形行為の意味

### ——形而上的実践としての芸術について——

いま、周囲を見回してみよう。私たちの周りは何かで満ちている。そこに何でも無いものはない。全てはそれが何であるのかという本質を備えて存在しているように見える。

ではそのような何かを何か足らしめている本質は何処にあるのか？

事物それ自体のうちに？別の世界に？神のうちに？主観に備わる形式に？

私はそうではないと考える。

私たちは成長過程において言語の掟の世界へ参入してしまった。もはや現実とはその約束事の内でのみ生じる現象に過ぎない。

知覚の現場を作り成す何かの群れ。それらは意識の上に言語の約束事によって引かれた輪郭線によって仮構されたものでしかない。

それら何かを意味付けている私たちの生きる世界。それも、言語による意味連関の産物である。私たちの思考。それすらも言語によって可能となっていることは明白だろう。また、目を閉じ何も考えないように努めても思考は勝手に湧いてくる。私たちは考えているのではなく考えさせられているのだ。

私たちは言語の奴隷である。

私たちは言語の掟に囚われた。

私たちの生きる世界は死の世界である。言語によって概念的に分節されたそれら何かの作り成す世界。死。実在しない本質によって固定された死。

しかし、私たちはただ一方的に従うのみなのか？

主体性とはあり得ないのか？そこに自由はないのだろうか？

そもそも私たちを縛るこの掟は初めからこのかたちだったのか。

そうではない。それは不易で固定されたものでも接触不可能な超越的なものでもない。  
それは私たちを規定しつつ、私たちの営みによって改変されていく。  
ならば、主体性とは、自由とは、そこにのみ宿るのではないか。

規定されつつも規定されきれない残滓としての主体性。規定されつつもそれを改変することによる自由。

近代が思い描いた絶対的に自由な主体を盲目的に信じることはもはやできない。しかし、そうした消極的な自由ならば、肯定し得るだろう。

謂わば、消極的な自由の行使とは、その消極性を消極性たらしめている掟への、それぞれの主体性の還元なのだ。

そう、私たちを規定するこの掟は、文化的無意識の領域にまで還元された、今は亡き人々のそれぞれの主体性の積み重ねによって成されている。

私たちの生きる知覚の現場や世界とは、こうした条件のもとでこの通りになっているのだ。つまり、死の世界とは、生の最先端である。

規定されつつもそれを改変することによる自由。その改変性を、私は芸術性と呼びたい。

そのような改変の仕方は様々であろう。そのうちの一つに、造形という営みを見て取ることは可能である。

通常、私たちに対して現れる対象は、分節という形相に、質料が従うことでこの通りに在る。しかし造形は、この関係を逆転させ得るのであり、それにより改変を生ぜしめるのである。

造形とは、形に関わる営みである。

また、全ては何かであって何でもないはないのだから、形とは何かの形である。つまり、形とは、それが何であるかということに従った上で、それがどのようにあるかということなのであり、造形とはそうしたどのような部分を変化させ、また、時に、そのようにして或る何かを別の何かへと変化させる営みである。

しかし、そうした通常の在り方を逸脱し、まさに「何でもない」ものを造形は作り得る。

それは、既存の分節体系では捉えきれない、私たちや私たちを縛る掟にとっての異物である。そうした異物を前にした時、私たちや私たちを縛る掟はどうするのか。それは、異物を捉えることができるように、掟の側を変化させることである。

それはまさに、質料が形相を従わせる事態である。

私は造形という営みの意味を、こうした、謂わば、文節改変とでも言い得る事態に見いだしたい。

こうした考えは一般的ではないだろうか。

しかし、上述の様な造形における通常のある方とは、既存の文節体系内で完結する、謂わば、単なるイラストレーションなのだ。

私は、芸術家として、美術作家として、造形という営みにこうした意味を見いだそう。

私たちの生きる知覚の現場や、そこに現れる何かの群れを意味付ける世界。そして、それらを可能とし、現象せしめる言語の掟。

私たちはそうして規定されつつも、それを造形という営みから改変し得る。

世界とは可塑的であり、私たちはそれを造形によって造形し得る。造形という、形を扱うまさに形而下的営みは、その枠を超え、文節改変として形而上的实践足り得るのである。

私たちは奴隷だが自由にもなれる。芸術の芸術性を私はそのように捉え、私もまたその中で自由を求めよう。

菊池遼